

8. ブラジルの対外経済関係

ブラジルはロシア、インド、中国とともに BRICs として総称され、人口が多く経済成長が期待できる国として注目を集めている。

日本では 1980 年代の高いインフレ、通貨の切り下げ等の影響による負のイメージが残るが、近年は再び脚光を浴びている。その主な理由は、国内経済が好調で消費市場が発展していること、資源供給大国としての地位が高まり、資源供給をブラジルに依存する期待が大きいこと、石油・天然ガスの自給が可能な国となっていることなどがあげられる。

そこで、ブラジル経済好調の要因と成長持続のための課題、資源型産業分野の事例研究、注目すべき相手国との対外経済関係、および最近の貿易、直接投資の分析を行った。

本報告書は次の 5 部構成となっている。

1. ブラジルが今後も安定した成長が可能であるのかに着目し、成長を阻害する可能性のある課題を「ブラジル・コスト」として捉えた分析を行なっている。

近年のブラジル経済は、インフレ抑制に成功していること、輸出が好調であること、外貨準備高が増加し対外債務の返済能力を高めていること等、高い評価を得ている。

一方、早急に取り組む課題として「ブラジル・コスト」の問題をあげている。ブラジル・コストとは、政府の複雑な行政システム、インフラ整備が不十分であることによる企業活動の悪影響、税負担を軽減させる政府への取り組みが必ずしも企業が満足する効果を生んでいない状況に関係している。そのうち、税制に関わる諸問題やドル安レアル高による為替レートの慎重な運用と企業の国際競争力強化の政策との整合性が重要と指摘している。(第 1 章 「ブラジル経済の課題は、インフレ抑制と成長の両立」)。

2. 事例として、世界有数の鉄鉱石の産出国で輸出国でもある鉄鋼関連産業を取り上げている。鉄鋼業の世界再編成が進むなかで、ブラジルの ACETIA のアルセロール(当時)の買収を通じ、世界最大手のミタルは中南米地域でも最大の生産拠点となった。ブラジルが鉄鉱石の供給国であることも、世界の鉄鋼業界の再編に影響を与えていることを指摘し、生産者のリオドセの鉄鋼メーカー投資拡大をとりあげている。日本の鉄鋼メーカーによる同社等との関係強化に動いており、ブラジルがメキシコと並び鉄鋼需要の拡大が期待できるとしている、(第 2 章 「ブラジル等の中南米諸国における鉄鋼産業再編成動向」)

3. ブラジルの対外経済関係～特に他の BRICS 諸国との関係のうち、関連統計とともに、次の点を探り上げている。

- 1) 「中国のブラジルへの経済進出をめぐる問題点」

- 2) 「ブラジルの対インド・南アフリカ共和国との関係」
- 3) 「インド市場開拓への南米・米国大豆業界との連携」

4 . ブラジル側および主要相手国側の統計をもとにした近年におけるブラジルの貿易と直接投資の動向を分析している。

- 1) 2006 年のブラジル貿易は、輸出 (1375 億ドル)、輸入 (913 億ドル)、通関黒字額 (461 億ドル) が、いずれも過去 10 年間での最高額になっている。

輸出相手先は米国が最大であることに変わりがない。アルゼンチン、中国向け輸出が好調で、アルゼンチン向け輸出は初めて 100 億ドルを超えている。

品目別では、鉄鉱石 (895 億ドル)、原油 (690 億ドル)、砂糖 (617 億ドル)、大豆 (566 億ドル) と上位 4 品目は原燃料で占めている。

世界貿易全体に占める割合が高いのは、大豆 (世界貿易の 36%)、鉄鉱石 (同 27%) である。

注目される燃料用エタノールは、前年比 110% 増の 14 億ドルで、米国向けが 52% を占めている。

- 2) 2005 年のブラジルの対内直接投資額は 215 億ドル (前年比 6% 増)。前年に比べ、増加が著しいのは、同 220% 増の日本 (46 億ドル)、26 倍増のメキシコ (17 億ドル)、84 倍増のベルギー (7 億ドル) である。

業種別では、サービス業が 60% を占め、企業向け役務サービス業 (14%)、小売業 (10%)、通信業 (9%) が上位にある。

5 . 巻末にブラジルの経済指標、直接投資、貿易を把握できる統計を掲載している。